



大図研京都ワンディセミナー 終了しました

『立命館大学深訪～今話題の「ぴあら」と日本文化デジタル・ヒューマニティーズ
拠点研究の一端に触れる』

概 要：

現在、大学図書館において「ラーニング・コモンズ」と呼ばれるスペースを設けて学生を中心とした利用者の学習を支援する動きが注目されています。ラーニング・コモンズは、学生が自主的に学習するための資料や設備、サービス等を提供する場として設置されています。

今回は、2011年4月にオープンした立命館大学のラーニング・コモンズ「ぴあら」

(<http://www.ritsumeit.ac.jp/acd/mr/lib/plr/index.html>) を見学してお話を伺いたいと思います。

さらに、今回のセミナーでは、有形無形の文化資産のデジタルアーカイブ研究を推し進める立命館大学のアート・リサーチセンター (<http://www.arc.ritsumeit.ac.jp/>) の金子貴昭先生にご講演いただきます。金子先生からは、現在研究されている板木デジタルアーカイブ

(<http://www.dh-jac.net/db9/hangi/>) についてお話を伺います。金子先生は「板木書誌学」という

観点からの研究を行っておられます。印刷後の書物を眺めるだけではなく、その元となった板木の形やサイズと紙質の混在パターン等を研究することで、摺りあがった書物に現れた様々な現象について理解したり、近世の出版課程を明らかにしたりすることができるということです。

講 師：金子 貴昭先生（立命館大学衣笠総合研究機構研究員）

日 時：2012年12月15日（土）13：30～17：30

（13：15～末川記念館第3会議室にて受付開始）

※終了後、情報交換会兼京都支部忘年会を開催いたします。

場 所：立命館大学衣笠キャンパス 末川記念館／ぴあら／アート・リサーチセンター

参加者：42名

※次頁より、角野氏、大西氏、加川氏による参加報告を掲載しています。

[目 次]

大図研京都ワンディセミナーのご案内	…	1
小特集：大図研京都ワンディセミナー「立命館大学深訪～今話題の「ぴあら」と日本文化 デジタル・ヒューマニティーズ拠点研究の一端に触れる」参加報告		
立命館大学 知の拠点で学び考えたこと	角野 容子	… 2
ARCモデルの衝撃とピア・ラーニング	大西 賢人	… 4
始まりはいつも京都から	加川 みどり	… 6
新入会員挨拶		… 8

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

小特集 :大図研京都ワンディセミナー「立命館大学深訪～今話題の「ぴあら」と日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点研究の一端に触れる」 参加報告

立命館大学 知の拠点で学び考えたこと

角野 容子

2012年12月15日(土)に、大学図書館問題研究会京都支部主催のワンディセミナーに参加させていただき、このような参加報告執筆の機会をいただいたので、ここに報告させていただきます。

1. 講演「立命館大学アート・リサーチセンターのデジタルアーカイブ活動：特に、板木デジタルアーカイブについて」

(講師：立命館大学衣笠総合研究機構研究員 金子貴昭氏)

1-1. アート・リサーチセンター (以下 ARC) 概要

ARC は、「芸術、芸能、技術、技能、技巧を中心とした有形・無形の人間文化の所産を、歴史的、社会的視点から研究、分析し、記録・整理・保存・発信」する活動を行っている機関である (講演資料より)。

国内有数の所蔵数を誇る浮世絵コレクションのほか、歌舞伎関係資料、京都資料コレクション等を保有し、独自にデジタルアーカイブの構築・公開を行う。また、ARC モデル (後述) により、他機関の所蔵資料を積極的にデジタル化し、学術研究を多角的につなぐ取り組みを行っている。

1-2. ARC モデル概要

- ・収集対象の資料を所蔵している機関に赴き、研究者自らが資料を撮影
- ・撮影した画像を所蔵機関に納品
- ・研究者は研究利用権のみ保有し、画像の撮影者・制作者としての権利は主張しない
- ・情報インフラを持たない所蔵機関には、必要に応じてデータベースサーバ等を提供

この ARC モデルの非常に興味深い点のひとつは、研究者が自ら撮影を行うことである。これにより、有名な作品のみに偏らない網羅的な資料収集が行えるとともに、研究対象としての視点で資料を撮影・メタデータの記録が行える。例えば、日本陶磁器データベースなどでは、立体である陶磁器をあらゆる角度から撮影し、メタデータ収集に必要な銘なども鮮明に記録することができる。

さらにもうひとつの興味深い点は、所蔵機関と ARC の関係性である。デジタル化に必要な諸経費は研究者側の負担となり、かつ作成された画像は所蔵館に提供されるため、デジタルアーカイブの環境を持たない機関でもデータベースの構築が容易になる。

1-3. 板木デジタルアーカイブ

日本近世の出版文化を支えた板木は、質量が大きく、また墨などが付着しているため保存や研究利用が容易ではなく、今まで研究資料としての流通が困難であった。講師の金子先生は前述の ARC モデルを活用し、国内外の機関に保管されている板木の画像を撮影し、デジタルアーカイブ化を進めている。前述のように板木は墨で大変黒くなっているものであり、通常の複写や撮影では鮮明な画像を得ることができないため、4ヶ所

から順番にフラッシュを当てて撮影するなど、画像作成の様々な工夫もお聞かせいただいた。

板木は、当時の出版文化を知るためのまさに「生の」資料であり、かつての職人たちの工夫と苦勞の跡が見受けられる。例えば、板木の一部をくりぬいて別の木をはめる「入木」の技法は、従来は出版元が変わった時の情報修正等に用いられると考えられていたが、固くて加工の困難な木の節の部分にも利用されていたという事は、板木の調査・研究により発見されたことである。また、一枚の板木には通常4ページ(四丁)分が彫り込まれるが、印刷された板本を見ると、紙質やページのライン位置も四丁ごとに変化が見られるといい、これから研究が進む事によって、多くの発見が期待できる分野であろう。

2. 立命館大学「ぴあら」の概要説明と施設見学

2-1. 「ぴあら」の設備環境概要

- ・ グループワークエリア (大型ディスプレイ付きパソコン 9 台など)
- ・ パソコンエリア (20 台)
- ・ プレゼンテーションルーム (申込制、スクリーンおよびプロジェクター)
- ・ サポートカウンター (学生スタッフによる学習支援・情報検索支援)
- ・ ノートパソコン貸出 (90 台)

2-2. ぴあら見学

まずぴあらに入る前に目に付いたのが、ぴあらをアピールするためのポスターである。ぴあらのコセプトや活用方法などがピクトグラムなどで表された、シンプルながらも印象的なデザインだったが、学生が考案したものだという。

ぴあらの内部に入ってみると、立命館大学のロゴカラーである赤を基調とした椅子が配置された室内は、多くの学生でにぎわっていた。備え付けのパソコンを活用する人や、講義の課題なのか、ディスカッションをするグループも複数いた。部屋の奥にあるプレゼンテーションルームはガラスで仕切られており、まさに学生のグループが使用しているところであった。図書館には以前からグループ学習室が存在しており、同様の目的で利用可能である。ぴあらが新しくできたことにより、グループ学習室の利用は減るかと思われたが、ぴあらが混んでいる時にはグループ学習室に来るようになったため、利用は伸びているのだという。ぴあらによって主体的な学びが定着した結果、グループ学習の需要が増えたのであろう。場の提供によって生まれた学びの意識改革が、着実に定着・展開しているようである。

また、ぴあらの利用実績を可視化する取り組みとして、学生スタッフによる利用人数カウントが行われている。常に人が出入りする空間であるため、1日2回程の定刻にぴあら内にいる人数を数える。これは、貸出数などに表れない滞在型図書館サービスの新たな評価方法として、非常に興味深いものである。

3. ワンディセミナーに参加して感じたこと

板木デジタルアーカイブについては、元々浮世絵などの絵画が好きで板木の彫師の高い技術力に興味があったため、個人的にとっても面白かったのだが、板木研究の分野は研究者が非常に少ないと知り驚いた。きっと私達は、これから発展する研究分野の黎明期を見ているのだろう。そして、その黎明期を支える ARC は、画期的なデジタルアーカイブのモデル構築により、研究者が自己の研究環境や地理的条件などにとらわれないより自由な研究を可能にし、今後の学術研究の発展に大きな意味をもたらすと思われる。それは、学生も含めた研究者と日々接する大学図書館員にとっても関わりの深いテーマである。今回の講演は大変貴重な機会だったといえるだろう。

ぴあらについては、学生がデザインしたポスターや、学生の学習支援サポーターがい

ることなど、運営の中に学生がかかわれる部分が多くあり、学生たちが自然と、「自分たちのための空間」という意識を持ちやすいようになっていて感じた。自らの仕事の中では、「これがきっと学生のためになるはず」という図書館員の独り相撲になっていることがたびたびあるため、もっと自然な意識作りに目を向けたいと思った。設備を整えることも重要だが、その先にある、「学生の主体的な学びの育成」に向けてどのような空間を提供するか、ということを考えさせられて、大変有意義な見学となった。

最後になりましたが、このような機会を設けてくださった大学図書館研究会京都支部の益々の発展をお祈りするとともに、講師の金子先生、アート・リサーチセンターの皆様、立命館大学図書館の皆様、支部委員の皆様方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

かどの ようこ（京都教育大学附属図書館）

小特集：大図研京都ワンディセミナー「立命館大学深訪～今話題の「ぴあら」と日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点研究の一端に触れる」参加報告

ARC モデルの衝撃とピア・ラーニング

大西 賢人

2012年12月15日に立命館大学にて、大図研京都ワンディセミナー「立命館大学深訪—今話題の「ぴあら」と日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点研究の一端に触れる」が開催されました。小雨が舞うあいにくの天気でしたが、立命館大学アート・リサーチセンター（以下、ARC）と話題のラーニング・コモンズ「ぴあら」の見学の豪華二本立てということもあって会場はほぼ満席の状態でした。

「立命館大学アート・リサーチセンターのデジタルアーカイブ活動—特に、板木デジタルアーカイブについて」金子貴昭氏（立命館大学）

はじめに立命館大学衣笠総合研究機構研究員の金子貴昭先生による ARC と板木デジタルアーカイブについてのお話がありました。ARC は「芸術、芸能、技術、技能、技巧を中心とした有形・無形の人間文化の所産を、歴史的、社会的視点から研究・分析し、記録・整理・保存・発信」することを目的として 1998 年 6 月に設置されました。ARC ではデジタルアーカイブの構築・公開が積極的におこなわれていますが、その対象は浮世絵コレクションや歌舞伎関係資料といった所蔵資料だけにとどまりません。「ARC モデル」と呼ばれる手法を用いて、国内外の他機関に所蔵される日本関係資料についても、デジタルアーカイブ事業を積極的に展開しています。その特徴は次のような点にあります。デジタル化に関わる機材や経費は所蔵機関ではなく ARC 側が外部資金等を獲得して負担する、研究者自身による悉皆調査・デジタル化・データベース化をおこなう、撮影者・製作者として諸権利を主張しない、所蔵機関にオリジナルのデジタル画像を提供する、情報インフラをもたない所蔵機関にはサーバ機能を提供する、など。このように所蔵機関の財政的な負担を軽減し、資料を熟知した研究者の手によって効率的に作業がおこなわれる ARC モデルからは、大英博物館所蔵の浮世絵のデジタルアーカイブなど国際的なデジタルアーカイブも生み出されています。

後半は金子先生の研究テーマである板木デジタルアーカイブのお話でした。板木とは「近世（江戸時代）の商業出版において用いられた印刷の道具」でページ全体の内容を

山桜などの木の板に彫ったものをいいます。現代でも「版權」といいますが、近世出版においてはこの板木を所有（板株）していることが権利の所在を明らかにするうえで非常に重要な意味をもっていました。ただ、板木は汚い（墨・埃・カビ）、重たい、かさばる、鏡像のため文字判読が困難、黒いので複写しにくいといった整理や利用面での扱いづらさからこれまで研究資料として余り活用されてきませんでした。そこで ARC では奈良大学所蔵の約 5,700 枚の板木を用いて板木デジタルアーカイブを構築しました。板木デジタルアーカイブでは、鏡像を反転させて表示したり、複数方向から撮影した画像の切り替え機能など板木を利用しやすいように工夫された板木閲覧システムを構築しています。また、板木を刷った紙の本を表示する書籍閲覧システムや板木に関する研究情報をあつめた出版記録データベースと連携させることで、板木に関する様々な情報を入手することができるシステムになっています。これまでの板木の調査から、反り止めに使われた端食には時代による変遷があること、再利用された板木の厚さ、専ら内容訂正のためとされていた入木が木の節の対策として用いられていたことなどが判明したそうです。今後はこのような板木から得られる様々な情報を蓄積していくことで「板木書誌学」を構築し、それを「板本書誌学」にフィードバックすることで、板木研究から近世文芸研究・出版研究を刺激していくことが重要という指摘がありました（金子先生の研究は『近世出版の板木研究』という本にまとめられ法蔵館から 2013 年に刊行予定とのことです）。

発表の後の質疑応答で何名かの方が言及されたように、ARC モデルに衝撃を受けたのは私だけではなかったのではないのでしょうか。図書館でも所蔵資料のデジタル化事業をおこなうことがあります。予算の確保以外にも創りあげたデジタルアーカイブをどうやって利活用していくかという課題を抱えることが少なくありません。しかし、ARC モデルでは資料を研究対象とする研究者がその研究活動の一環としてデジタルアーカイブを構築するため、はじめから活用を目的としている点が特徴的です。その結果として新たなデジタルアーカイブとともに、金子先生の板木書誌学のような新しい研究手法を生み出すきっかけとなっていることが非常に興味深く感じました。また ARC から所蔵機関にオリジナル画像も含めたすべての画像を提供し双方で保存するという仕組みは、Amazon Web Service などのクラウドストレージのようにオンラインではないにしろ、デジタル資料の資料保存の観点からも興味深い事例と感じました。

「ぴあら」概要説明・見学

休憩をはさんで、立命館大学図書館サービス課の石井英理香さんから「ぴあら」の概要について説明がありました。「ぴあら」は 2011 年 4 月に衣笠キャンパス図書館に「ピア・ラーニング」を生み出す新しい学習空間として開設されました。衣笠図書館内のマルチメディアスペースに配置されていた 120 台の PC のリプレイスを契機として、2010 年にうちだされた「多様なコミュニティにおける主体的な学びの展開」「学ぶことの喜びを実現できる学園づくり」という学園ビジョンの実現のため、図書館と学内の教学部門との間で新しい学習空間についての検討が開始されたそうです。その結果、学部をこえた知の交差点として、またコミュニティ形成の中核的拠点としての役割を担う図書館において、主体的な学びを促し、学びの高度化を図ることを目的とした「ぴあら」が開設されることになったそうです。

「ぴあら」は「仲間とともに学ぶ楽しさ、成長する喜びを感じる場であること」というコンセプトのもと、グループ学習用のディスプレイと可動式の机や椅子が配置されたグループワークエリアや、大型スクリーンやプロジェクターがあるプレゼンテーションルームなどから構成されています。プレゼンテーションルームを含め「ぴあら」全体が開放的で、外からの視線を感じる劇場型の学びの空間となっています。「ぴあら」の利用状況については、14 時から 16 時の時間帯での利用が多く、土日を含めて平均 44・45 人程度の利用があるそうです。プレゼンテーションルームは 6 月頃から利用が増加し、授

業時間の総コマ数に換算して約 50%程度利用率ということでした。また「ぴあら」には学生スタッフが担当するノートパソコンの貸出カウンター、IT・情報検索サポートカウンターと、アカデミック・ライティングを支援するライティング・サポートデスクが設置されています。サポートデスクの利用率はまだ低く設置場所や導線など空間的なデザインやニーズについては今後の課題ということでした。2012 年 4 月に開設されたびわこ・くさつキャンパス図書館（メディアセンター、メディアライブラリー）の「ぴあら」では、それまで別の場所でおこなわれていた「駆け込み寺」とよばれる学習サポート体制を引き継いで、こちらは活発に利用されているということでした。

見学したのは土曜日にも関わらず衣笠の「ぴあら」は活気にあふれていました。ラーニング・コモンズが、今日の大学における「学び」を取り巻く課題を全て解決してくれる唯一の解ではないとは思いますが、少なくとも学生の主体的な学びを可視化する空間として重要な役割を担っていると感じました。概要説明のなかで「ぴあら」設置の副次的な効果として紹介された「文学部の学生ラウンジなどでも、それまではあまり見られなかった学生が勉強している風景を目にすることが多くなった」という興味深いエピソードもその表れではないでしょうか。さらに「ピア・ラーニング」の支援に学生スタッフなどの「ピア・サポーター」が活躍しているのも大きな特徴ではないかと思います。ライブラリースタッフを含め全学の「ピア・サポーター」は 3,000 名という数はただただ驚くばかりです(沖裕貴「ピア・サポート・プログラム—立命館大学」『IDE-現代の高等教育』546, 2012, pp.54-59)。教職員だけでなく「学び」を実践する学生自身が「学び」を生み出す活動に参加することでより効果的な学習支援の方法が今後生まれてくるのかもしれない。

図書館は研究支援や学習支援を担う役割を担っていますが、ただそれらの支援は図書館が単独でおこなうだけでは不十分です。今回のセミナーを通じて、同じニーズをもった学内外の研究者コミュニティと協同、あるいは学内の他の組織や教職員そして学生と協同することによって、より効果的な支援というものを絶えず模索していくことが必要ではないかとあらためて感じました。ARC や「ぴあら」といった先進的、意欲的な立命館大学の取り組みに今後も注目していきたいと思います。

おおにし まさと（京都大学文学研究科図書館）

小特集 : 大図研京都ワンディセミナー「立命館大学深訪～今話題の「ぴあら」と日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点研究の一端に触れる」参加報告

始まりはいつも京都から

加川 みどり

大学図書館問題研究会という団体の存在を知ったのが 2010 年 6 月に行われたワンディセミナーでした。仕事の一環として所属大学図書館の代表メールの管理をしているため、ジャンクメールを含めて大量のメールを振り分ける作業を毎朝しています。このメールアドレスに京都支部ワンディのセミナーの案内が届いたことが始まりでした。その当時何故かそのメールに誘われるように後輩と共に京都支部の情報リテラシー教育についてのワンディセミナーに参加させて頂きました。そして、その年の夏に開催された全国大会に参加し、兵庫支部へのお誘いを頂き、大図研に入会いたしました。今回のセミナーについても、なんとなくイベントのタイトルが“面白そう”と参加し、そして今回なぜか初めて支部報の原稿依頼を頂き、無い知恵、無い語彙を絞って原稿を書いている

事を考えると、とても不思議な気分になります。2年前のメールのタイトルが私の好奇心をくすぐらなければ、大図研に入会することもなかったでしょう。なぜか私にとって何時も「始まりは京都から」です。

今回のワンディセミナーは立命館大学のアート・リサーチセンターのデジタルアーカイブ活動について、板木閲覧システムの事業に携わっていらっしゃる金子貴昭先生のお話とアート・リサーチセンターの見学、そして話題の「ぴあら」の概要説明と見学という盛り沢山の内容でした。

アート・リサーチセンターのデジタルアーカイブ事業は所蔵品のみならず世界中の機関の所蔵品も対象としているところが注目すべき点です。独自のARCモデルと名付けられた仕組みにより、**The British Museum** や **Victoria & Albert Museum** 等の協力を得てデジタルアーカイブを行っているということです。ARCモデルとは、「デジタル化にかかる機材、旅費含めて諸経費は研究者が外部資金を獲得する等して負担する。研究者自身がデジタル化作業を行う。名品だけを抽出せず悉皆調査する。デジタル画像を所蔵館に完全納品する。研究者は研究利用権のみ獲得し撮影者・製作者としての諸権利を主張しない。研究者自信がメタデータ、データベースの構築・管理・運営に主体的に関与する。インフラを持たない所蔵機関にサーバー機能を提供する。」ということで研究者自身が研究者に必要なデータ入れることにより、とても面白い利用しやすいデータベースが出来上がるということです。今回ご説明くださった金子先生は板木の専門家であり、板木をアーカイブする独自のノウハウを構築されています。板木のデジタル化にあたっての撮影方法や板木の節やちょっとしたキズ等を観察することにより得られる情報を読みとるとということです。それにより板木書誌学を構築し今までの版本書誌学だけでは不十分であった部分を補い、版本書誌学をより強固にしていくというのが研究の方針ということです。すでに板木閲覧システムと書籍閲覧システムの連携がされており、板木と版本を並べて閲覧することができます。

アート・リサーチセンターの見学会では多目的ルーム、スタジオ、アーカイブ室、閲覧室を見学しました。普段入る事の出来ない施設、しかもサーバーや様々な機材が置かれているような設備を見せて頂き、また金子先生ご自身で購入された板木を触らせて頂く機会もあり、とても貴重な経験をさせて頂きました。

立命館大学のラーニング・コモンズ「ぴあら」は外から丸見え、というところが味噌のようです。「ぴあら」の中で勉強している学生たちを見て、「自分も勉強しないと！」と焦る学生を目撃したとか、「ぴあら」ができてから図書館以外のロビーのようなところでも勉強している学生が目撃されるようになった、ということです。「ぴあら」見学会の当日も活発に議論をしている学生グループがいました。「ぴあら」のコンセプトが「仲間（ぴあ：Peer）とともに学ぶことで得る、ひらめき・発見」ということで、コンセプト通りに機能している光景を見ることができました。専攻する分野にもよりますが、人間はお互いに切磋琢磨し合うことにより成長するものです。かつて学校近く喫茶店や居酒屋で議論を戦わせるという光景を目にしたものですが、今では喫茶店やカフェですることとはスマホいじりと変わってしまいました。図書館等大学が学生どうし議論する場所ときっかけを提供する必要性を感じます。私の個人的な印象ですが、「ぴあら」は広すぎず適度に混みあっているという事も学生たちをその気にさせる味噌であるかと感じました。

1時半から5時半まで4時間があっという間に過ぎた冬の京都でのひと時でした。企画をしてくださりました京都支部のスタッフの皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

かがわ みどり（神戸松蔭女子学院大学）

京都支部：新入会員挨拶

2011年度より、新しく京都支部に加入して下さる会員の皆様にご挨拶をいただきました！今後、順次掲載をさせていただきますので、どうぞお楽しみに！

● 山上 朋宏さん

京都大学附属図書館の山上朋宏と申します。本年度から京都大学に採用され、大図研にも今年から入会させていただきました。今回機会をいただいたので、まとまりがなく恐縮ですが自己紹介をさせていただきます。

まず、私の出身地について話させていただきます。私の出身地は兵庫県の淡路島です。人口は約14万人、面積は琵琶湖より少し小さい島です。自然が豊かで温暖なこの島で高校まで過ごしました。

大学時代は淡路を離れ、主にサークルと専攻の研究に打ち込みました。サークルは三曲研究部という和楽器のサークルで尺八のパートをしていました。尺八の魅力に取りつかれ、完全な片思いに終わりましたが毎日6時間ほど練習する日々を送りました。和楽器という眠くなりそうという印象をお持ちの方もいらっしゃると思いますが現在はジャズやロックの要素を取り入れた現代邦楽というジャンルもあります（慣れれば古典曲もいいものです）。もしご興味をお持ちの方がいましたら音源をお貸しいたしますので、お気軽にお申し付けください。

そして、専攻ですが、私はイスラム史を取り、「中世イスラム社会のヤクザ」をテーマに卒論を書きました。なぜこのテーマにしたかと言いますと、イスラム社会にヤクザのような存在があることに対する驚きが最初のきっかけでした。調べるうちに地域の顔役の他に、都市の防衛や徴税に対する反乱などの主体にもなり、略奪を事とするにもかかわらず民衆の支持を得る「愛だけでも恐怖だけでも生きられない」彼らに興味を持ち、研究することになりました。

次に、図書館を志望した理由ですが、私は小さい時から本が好きで高校の時には図書館で働きたいと漠然と考えていました。転機になったのは大学で「図書館活用法」という授業を受けたことです。この授業で図書館を使ってできることの幅広さを知り、このことをより多くの人に伝えたいと思い、図書館司書を目指す決意を固めました。最後になりましたが、現在は目録業務をさせていただいております。学生時代に使っていたNACSISに新しい書誌データを打ち込めることは本当に感無量です。それとともに目録業務は図書館業務の基本であり、自分のミスにより、利用者に資料が届かない可能性もありますので、気を引き締めて業務に取り組んでいます。

取り留めのないものになってしまいましたが以上で私の自己紹介を終わります。私は大図研で皆様から知識、情報、熱意をいただいておりますが、いつか自分も誰かに何かを伝えられるように努力していきたいです。どうかこれからもよろしく願いたします。

やまがみ ともひろ（京都大学附属図書館）